

フットパスにおけるウォーカーの嗜好性について

泉留維

日本では、2000 年頃から各地でフットパスの整備が始められ、現在では 100 以上のフットパスがあると言われている。このようなフットパスの整備の進捗は、日本における散歩文化とも言えるものが醸成してきたという見方もできる。実際、笹川スポーツ財団（SSF）によれば、週に一回以上、散歩（ぶらぶら歩き）やウォーキングをする人は、2002 年、1936 万人（実施率 19.2%）と 1168 万人（同 11.6%）だったものが、2012 年には 2284 万人（同 22.0%）と 1879 万人（同 18.1%）というように増加している（図 3、重複回答あり）。この実施率¹は、フットパスの本場とも言えるイングランドにおける週一回以上のレクリエーション目的の散歩・ウォーキングの 42.2%（イングランド交通省調べ）と比較すれば高いとは言えないが、少なくない人々がレクリエーションなどの目的で歩きに出ているのは事実である。

イングランドにおいては散歩・ウォーキングをするとなると、多くの人が公園内もしくはフットパスとなるが、日本では自然遊歩道やフットパスの数はそれほど多くなく、身近にはないこともあり、7 割以上が自動車道路沿い（SSF 調べ）となる。それでは、日本において、ある意味では一手間かけてフットパスを訪れるウォーカーはどのような人たちであろうか。今回、泉と廣川祐司（北九州市立大学）が合同で、ウォーカーに対してアンケートを行い、フット

パス利用者の嗜好性を明らかにしようとした。具体的には、ウォーカーが、フットパスに対して利便性や快適性を追求したレクリエーション空間であることを求めているのか、もしくはあまり手を入れず自然のままの状態を色濃く残した空間であることを求めているのかを明らかにし、そしてフットパス整備の方向性を示そうとするものである。評価尺度として用いる諸要素の選定については、既存研究（八巻ら、2003 など）を参考にして、16 項目を選定した。このうち、「フットパスの整備状況」、「フットパスの路面状況」、「コース上のベンチ・テーブル」、「道標」、「自然や建造物等の解説板」、「注意標識」、「コース設定」、「自販機・レストラン等」、「バス停・駅（起点および終点）」、「ガイド」、「地元住民との交流の機会」、「フットパスで人と出会う頻度」、「1 コースの歩行時間」の 13 項目については、3 または 5 段階で示した選択枝の中から嗜好に最も合うものを一つだけ被験者に選んでもらうようにした。また、「フットパス脇の植生荒廃」、「電柱や鉄塔などの人工物」、「自動車やバイクの走行」の 3 項目については、レクリエーション利用に対して主にマイナスの影響を与える項目であることから、許容範囲を示してもらうようにした（溝尾ら、1975；森・吉田、1990；八巻ら、2003）。

アンケートの配布対象は、代表性のあるフットパスとして、北海道の黒松内フットパス（北海道黒松内町）、東京都の多摩丘陵フットパス（東京都町田市）、そして熊本県の美里フットパス（熊本県美里町）を選択

¹ 実施率は、日本は 20 歳以上、イングランドは 16 歳以上の成人に対する値である。

した。これらのフットパスは、各地域においてもっとも初期の段階から取り組まれたフットパスであり、訪れるウォーカーも多い。アンケートは、各事務所や交流拠点に訪れたウォーカーに対して配布する形式をとった。配布期間は、2015年6月1日から9月30日で、各200部を留め置いた。9月30日時点での回収状況は、黒松内が60（回収率30%）、多摩が130（同65%）、美里が51（同26%）となっている。また、属性の割合としては、性別では女性が56.8%、年齢別では60歳以上が60.6%と多くなっている。居住地域では異なる市町村が74.3%、来訪回数では「はじめて」が47.1%となっている（図1および図2）。

現時点では、アンケートの集計については、単純集計と一部クロス集計しかできていないため、ウォーカーの嗜好性を明らかにするというアンケートの実施目的については分析することができない。しかし、最終的には主成分分析によって得られた主成分得点を用いてクラスター分析を行い、ウォーカーを分類し、その嗜好性を明らかにする予定である。以下、単純集計から見てくる傾向について記述する。

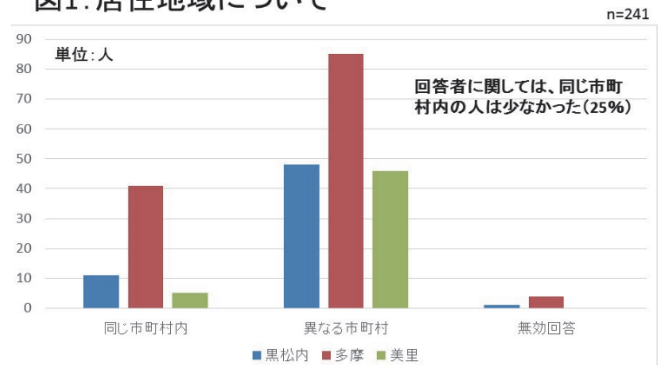
次ページからの図4から図10は、単純集計を行い、その中から特徴的な結果が出たものを図示している。図4から図6までは、フットパス上の設備などに関することである。図4「コース上のベンチ・テーブル」については、何らかの休憩場所があることを希望するウォーカーが多いことを示しており、特に大都市近郊のフットパスである多摩においては「ベンチ・テーブル」の両者の整備を求める割合が他に比べて高い。図6「自販機やレストラン等」については、

ウォーカー自身が飲食を持参するという意識が高い一方で、多摩においては食事ができる場所を求めるウォーカーも一定割合いる。

図8「ガイド」については、必要に応じてフットパスを案内するガイドがいることを望むウォーカーが多い（71%）が、一方で多摩においてガイドは必要ではないという回答も少なくない（多摩の回答者の約半数）。図9「地元住民との交流の機会」については、交流拠点があることが望ましいとするウォーカーが9割にものぼり、フットパスを歩きに来る人は単に歩くだけではない、他の目的も持って現地を訪れている可能性が高い。

アンケート結果：回答者の属性①

図1：居住地域について



アンケート結果：回答者の属性②

図2：来訪回数について

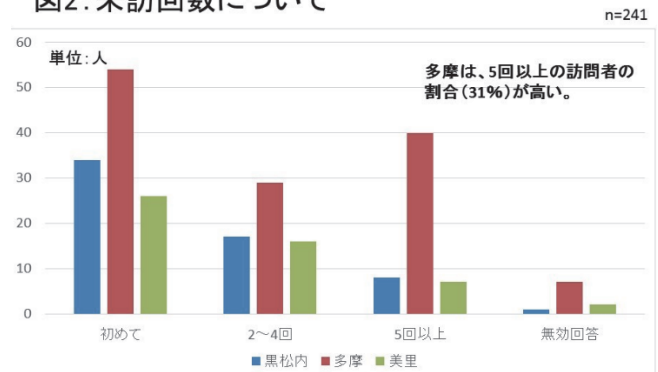
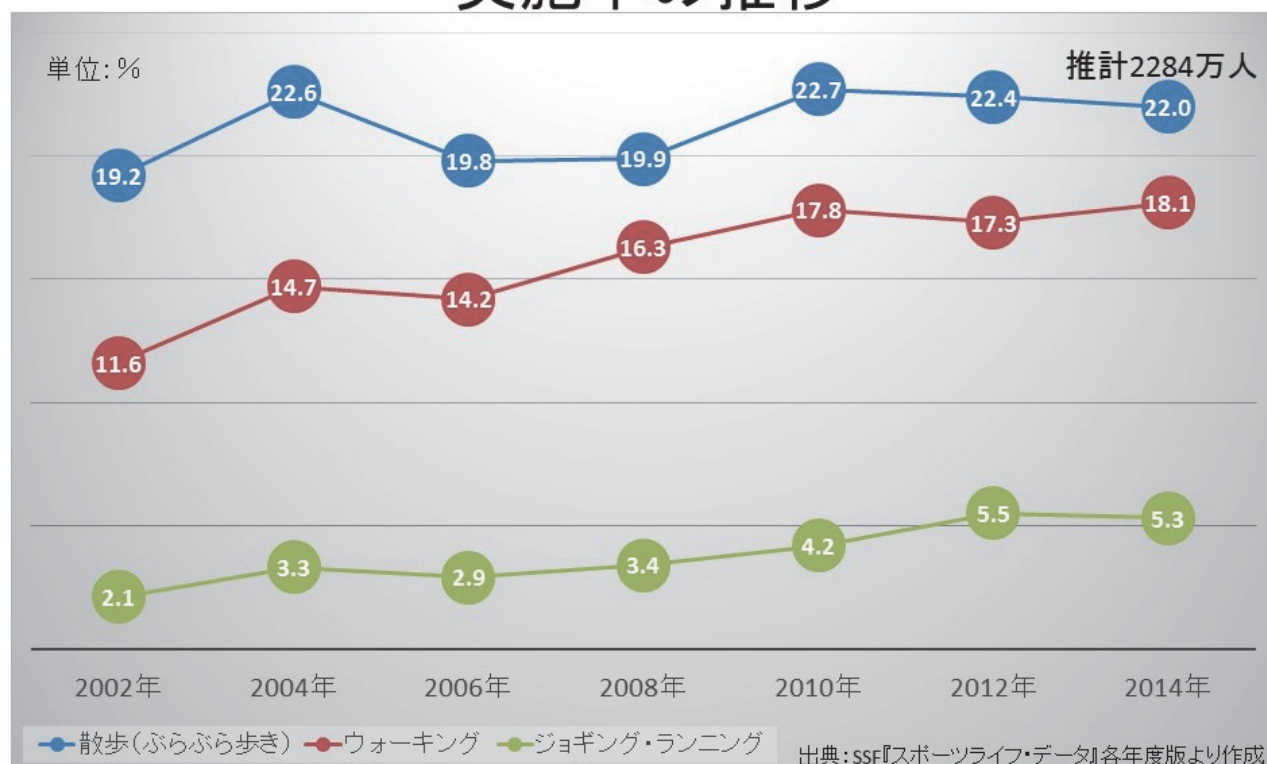


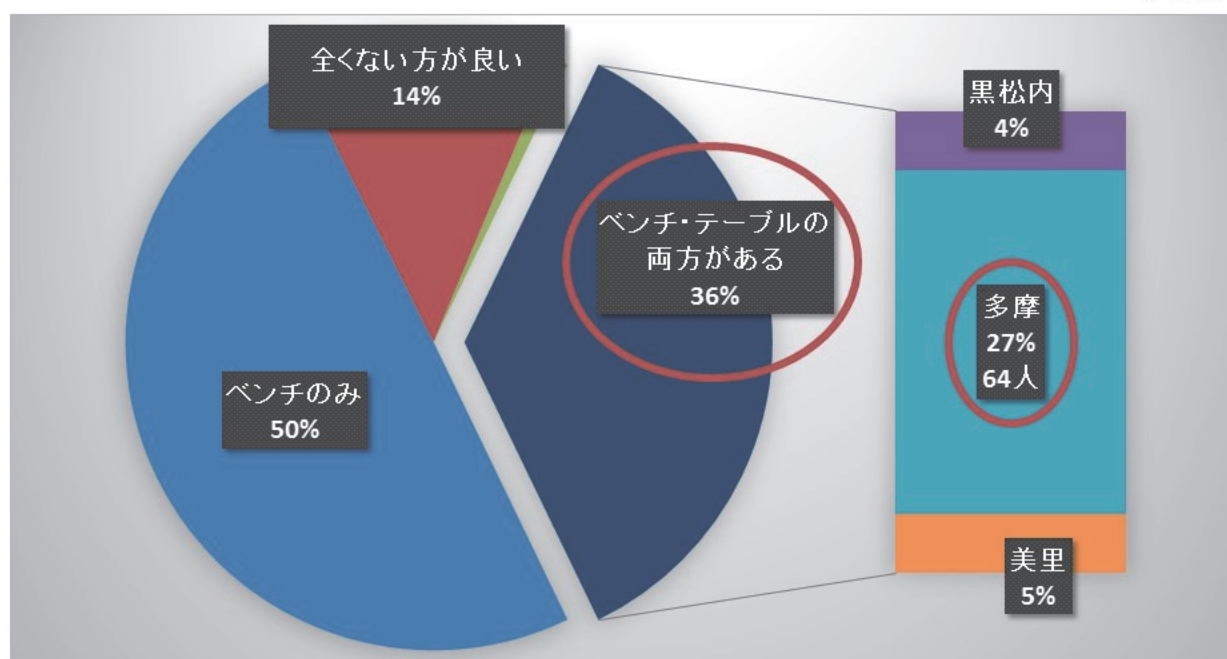
図3: 週一回以上の各スポーツの実施率の推移



アンケート結果: 望ましいものについて①

図4: コース上のベンチ・テーブルについて

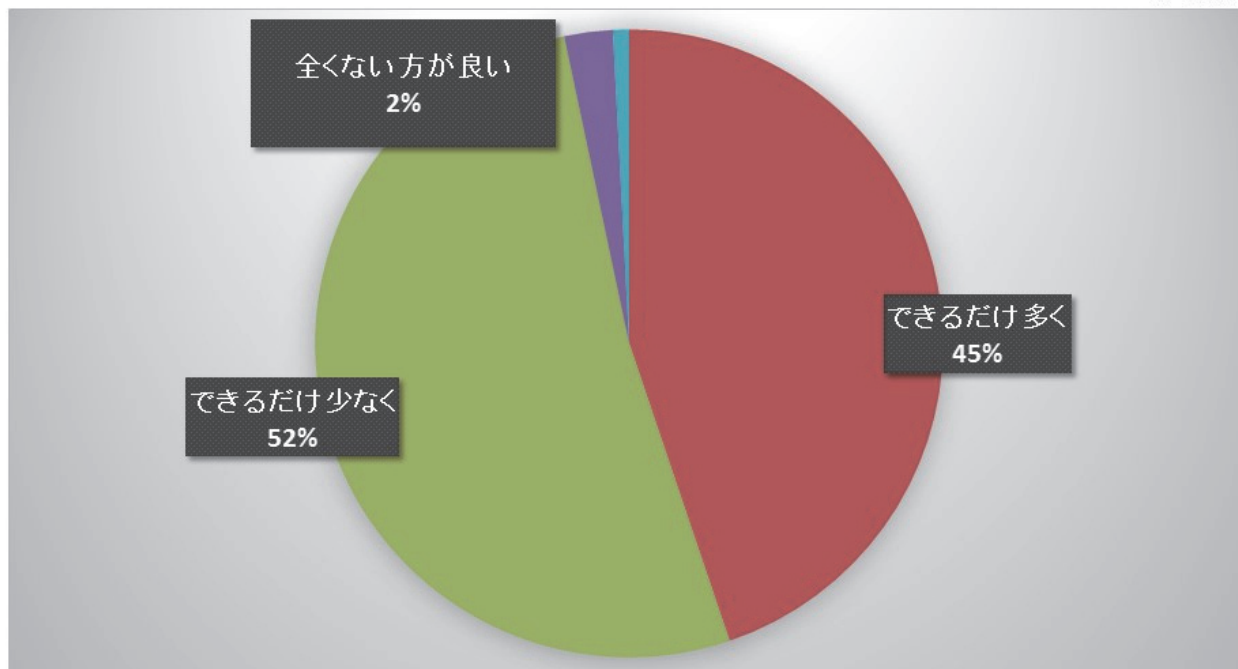
n=241



アンケート結果：望ましいものについて②

図5：自然や建造物等の解説板について

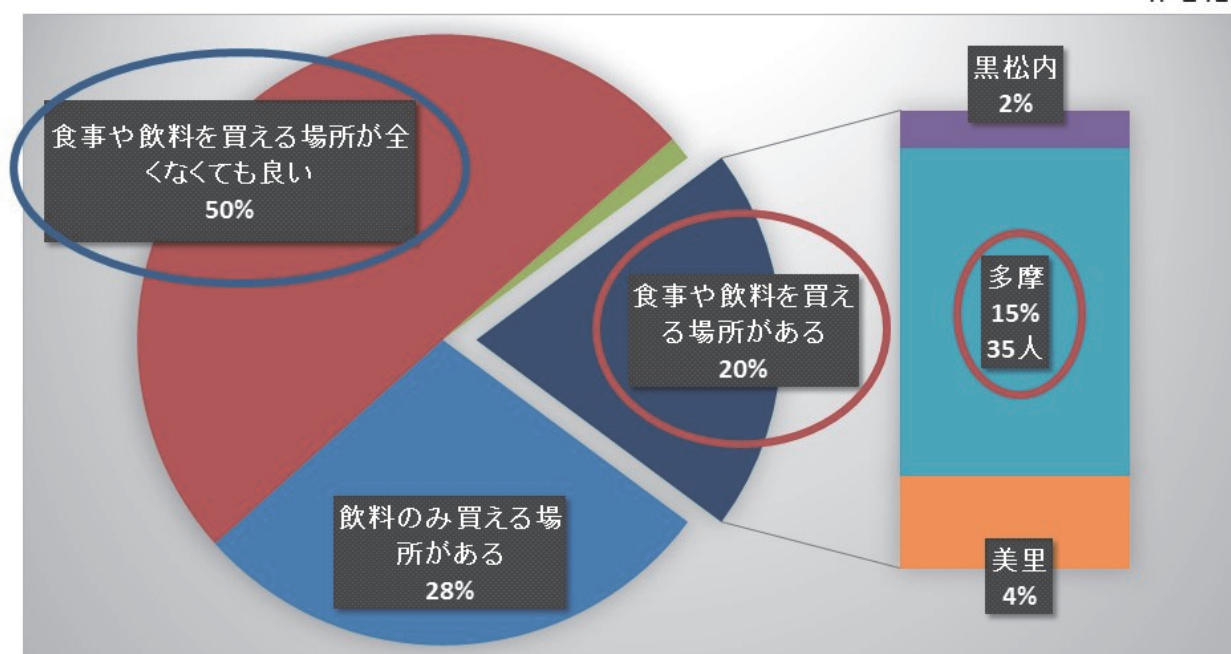
n=241



アンケート結果：望ましいものについて③

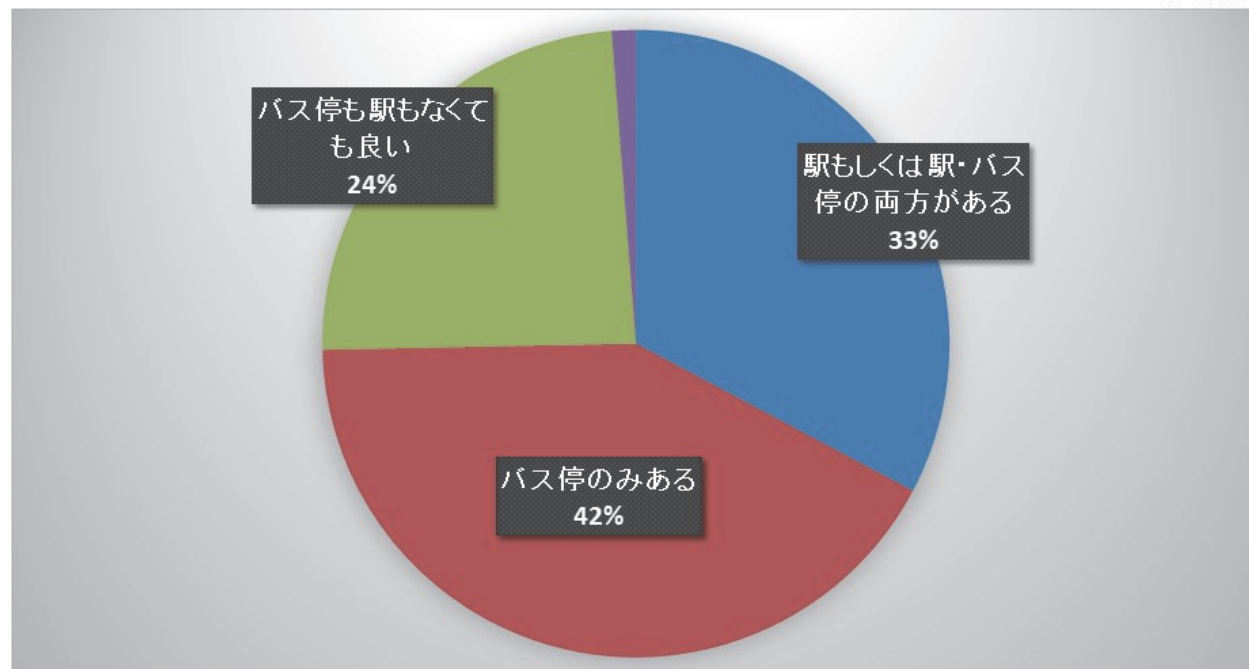
図6：自販機・レストラン等について

n=241



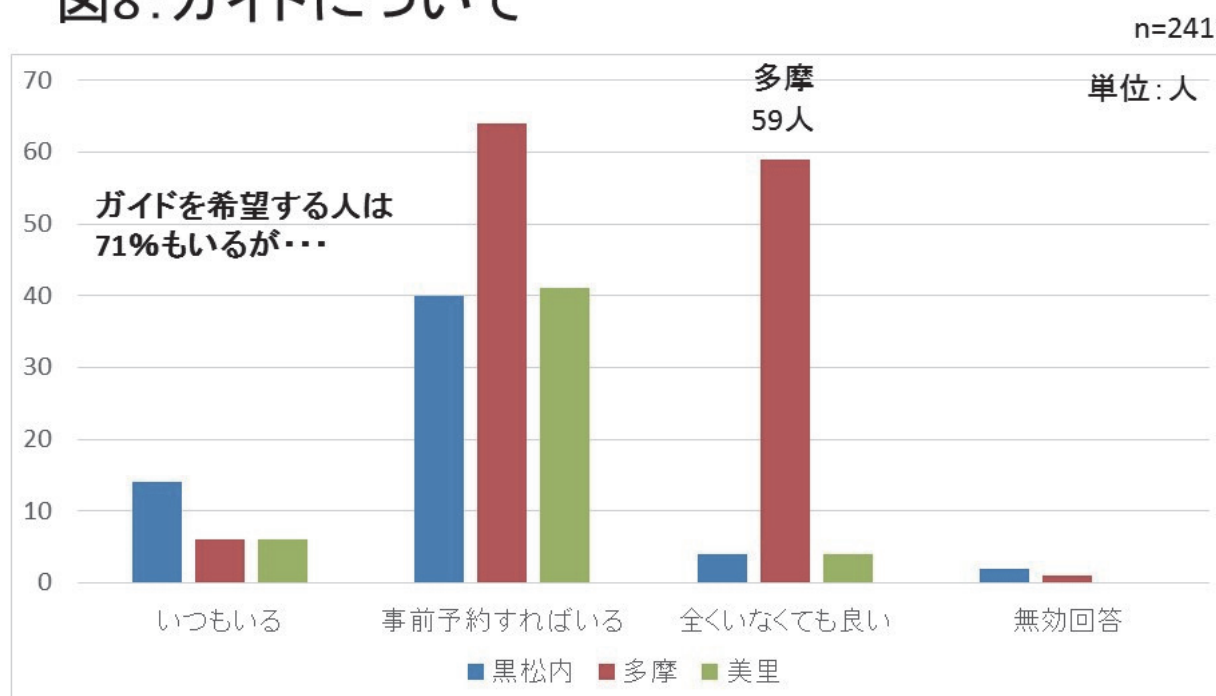
アンケート結果：望ましいものについて④

図7：バス停・駅(コースの起点および終点)について n=241



アンケート結果：望ましいものについて⑤

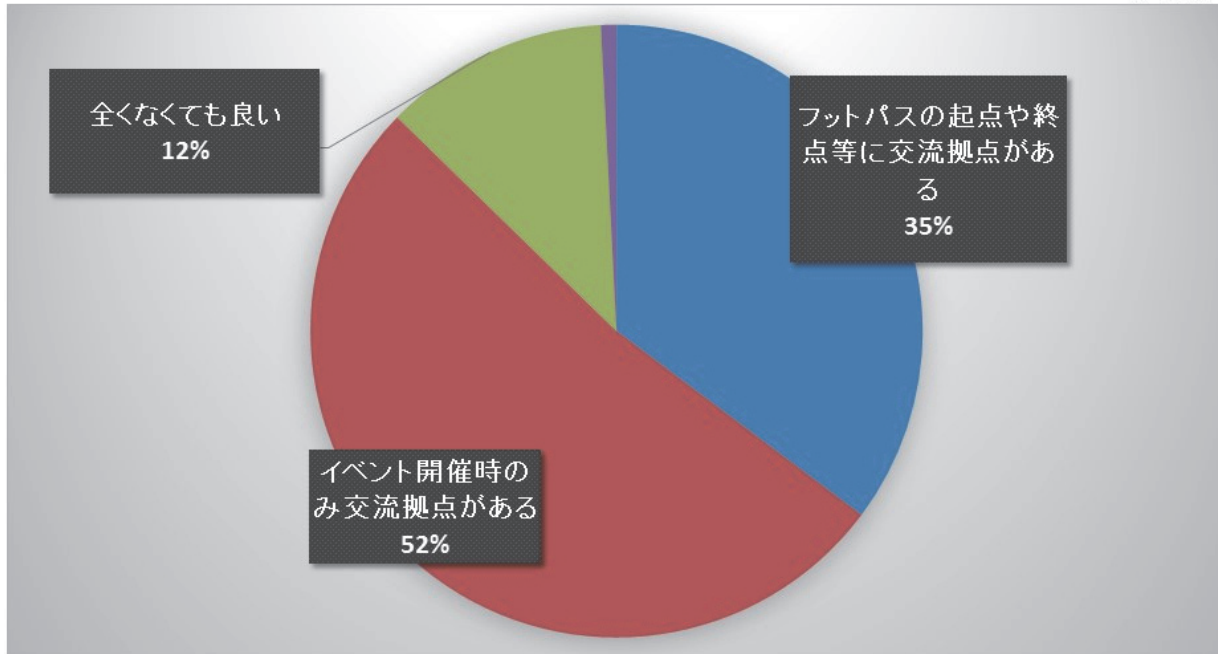
図8：ガイドについて



アンケート結果：望ましいものについて⑥

図9：地元住民との交流の機会について

n=241



アンケート結果：望ましいものについて⑦

図10：1コースの歩行時間について

n=241

